

説教

光は闇の中で輝く

ヨハネによる福音書 1章1～5節 大島 力 大学宗教主任



この2021年を皆さんはどのように過ごしてきたでしょうか。それは一人ひとり違うと思いますが、昨年来の新型コロナウイルスによるパンデミックの経験は共通しています。それは世界が、なかなか明けない闇の中に閉ざされてしまったという経験です。その中で、私たちはクリスマスを迎えようとしています。それは、どのような意味をもっているのでしょうか。

ヨハネ福音書の冒頭に「初めに言ことばがあった。言ことばは神と共にあった」とあります。この言ことばとは、イエス・キリストのことを指しています。そして、その「言ことばの内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった」と続いています。そして最後に「光は闇の中で輝いている」と記されています。実は、この言葉だけが、他の部分と違って、現在のこととして、私たちに語り掛け

ています。「光は闇の中で輝いている」。この言葉が、クリスマスの出来事の意味を明確に伝えていると思います。

私たちは毎年クリスマスを、夜が一番長く、昼が一番短くなる時期に迎えます。そのことには意味があると思います。「光を待ち望む」、「光がほしい」。クリスマスへの期待は、闇の中で、光を待つ経験です。2000年前の最初のクリスマスの時もそうでした。人々は暗さの中で、闇の中で、光を求めているのです。

それは、単に太陽の光という意味ではありません。イエス・キリストが生まれた当時のユダヤの国は、超大国であったローマ帝国によって支配されていました。植民地支配を受け、人々は様々な抑圧の中にありました。人々の暮らしも、一部の人々を除けば貧しいものでありまし

た。そのような中で、人々はメシア、つまり救い主の到来を待っていたのです。

イエス・キリストの時代より前に書かれた旧約聖書の詩編に、このような詩が書かれています。

「主よ、あなたを崇めます……夕べは涙のうちに過ごしても 朝には喜びの歌がある」(詩編30:2,6)。

このような、朝の光への期待が、長い間、旧約聖書の人々の心にあっただけでなく、イエス・キリストの誕生である、と新約聖書は告げています。人々は待ち続けました。そして、涙のうちに過ごす人々にも、朝は、喜びと共に訪れたのです。そのことが現実となったのが、イエス・キリストの誕生である、と新約聖書は告げています。

星野富弘さんのことを知っている人は多いと思います。私はいつもこの時期、その星野さんの経験と信仰に教えられます。星野さんは、中学校の体育教師になりたての頃、授業中の事故で首から下が麻痺してしまい、全く動けなくなってしまいました。鉄棒の模範演技を見せようとした、教育の熱心さが招いた事故でした。しかし、今は、口に絵筆をくわえ、花の絵を描き、そして、短い詩と共に私たちに強く励ましてくれています。その星野さんの本の中に、神への信仰が明確に記されている文章がいくつか載せられています。

「わたしは傷をもっている でも その傷の

ところから あなたのやさしさがしみてくる」(『風の旅』)。

「どんな時にも 神さまに愛されている そう思っている 手を伸ばせば届くところ 呼べば聞こえるところ 眠れない夜は枕の中に あなたがいる」(『あなたの手のひら』)。

これは、いずれも星野さんでなければ語れない言葉ですが、しかし、いろいろな傷を負いながら生きている私たちの心に触れてくる言葉です。私たちが生きるということは、様々な傷を負って歩いていくということです。また、私たちは、この世界で生きていく中で、大小の困難、また闇を経験します。しかし、神様の恵みと愛は、それを貫いて追ってくるものです。私たちが人生でぶつかる闇の中に、たとえそれが濃くても、光が射してくるのです。そのことを、クリスマスの出来事は私たちに告げています。

「夕べは涙のうちに過ごしても 朝には喜びの歌がある」。

詩編の詩人はこのように語っています。そしてたとえ、まだ朝が来なくても「眠れない夜は枕の中に あなたがいる」と言える。クリスマスは、それほどに神様がイエス・キリストにおいて、私たちに近づいてくださったことを覚える時です。「光は闇の中で輝いている」(ヨハネ福音書1:5)のです。